

第9回 APRU マルチハザードサマースクールを開催しました (2024/7/30-8/2)

テーマ：APRU, マルチハザード
会場：東北大学災害科学国際研究所

2024年7月30日～8月2日に第9回 APRU マルチハザードサマースクールが当研究所で開催されました。インドネシア、台湾、フィリピン、マレーシア、アメリカなど様々な国や地域から主に大学院生や若手研究者を中心に、約35名が参加しました。開会式では、東北大学の植木俊哉理事、当研究所の栗山進一所長、APRU事務局のベンジャミン・チョウ氏に開会の挨拶をいただきました。その後、村尾修教授（国際防災戦略研究分野）、マリ・エリザベス准教授（国際研究推進オフィス）、泉貴子教授（国際環境防災マネジメント研究分野）が講義を行いました。さらに、東北大学の圓山重直名誉教授より、福島原子力災害についてご講義いただきました。各講義タイトルは以下のとおりです。

- 村尾教授：Recovery from the 2011 Great East Japan Earthquake and Challenges for the Future
- マリ准教授：Housing and community recovery after 3.11
- 圓山名誉教授：Breakdown of safety myth in mega-scale systems: what we learned from the Fukushima Daiichi accident, and what we should have had learned from aerospace and Shinkansen technologies”
- 泉教授：International Framework for Disaster Risk Reduction

加えて、多賀城市、宮城県医療的ケア児等相談支援センター、CWSジャパン、カリフォルニア大学デービス校、東京大学地震研究所、バングラデシュ農業大学（現在、立命館大学客員教授として来日）の方々からご講義いただきました。参加者は、自治体の復興・防災の取り組み、インクルーシブ防災、NGOの防災での役割、AIなどの最先端技術を用いた地震予測などについて学びました。

2日目のグループワークでは、各グループで参加者がそれぞれの研究について紹介し、災害研究がいかに学際的で分野横断的であるかを学びました。また、3日目のグループワークでは、各グループが「災害リスクマネジメント計画」を作成し、自分たちの研究を活かしながら、将来の様々な災害リスクに備えるため、どのような貢献ができるかについて議論しました。

4日目の巡検では、東日本大震災・原子力災害伝承館と中間貯蔵施設を訪問しました。伝承館には、発災当初の原子力発電所の状況、避難行動やその課題などに関する数多くの展示が設置されており、当時の混乱状況や現在の復興の様子を知ることができました。中間貯蔵施設は除染された土壌を保管している施設になります。2045年までに被災地から集めた土壌の除染を終了し、それらを宮城県以外の場所に移動することを目標としています。土壌の輸送だけでも大変な時間と場所が必要なことから、除染された土壌を再利用してその量を削減するための研究やプロジェクトも行っています。例えば、盛り土を活用した道路に除染された土壌を使用するなどの実験です。

来年もサマースクールは継続して実施されます。これからも様々な国からの参加者に東日本大震災の経験について語り継ぎ、災害研究について議論を継続したいと考えています。

文責：泉貴子（国際環境防災マネジメント研究分野）
（次頁へつづく）



植木理事の開会の挨拶



栗山所長の開会の挨拶



村尾教授の講義



マリ准教授の講義



圓山名誉教授の講義



泉教授の講義



全体写真



グループワークの様子